

教育広報

No. 485

■発行/静岡県教育委員会
編集/生涯学習企画課
☎ 054-221-3674

年頭所感 21世紀の教育

静岡県教育委員会教育長 杉田 豊

新しい年が明けました。年頭に当たり、新世紀が「希望」に満ち、青い地球に生を受けた人皆が「幸せ」を実感できる社会となるよう祈念します。

はじめに

我が国の20世紀は明治から平成へと遷移する中、大きな戦いも経験し、文字通り激動の100年でありました。この間、教育界も価値観の多様化など、社会の大きな変化の中で、常に変革を求められました。

21世紀の社会は、国際化の一層の進展に伴う産業競争の激化、ますますの知識社会への移行、さらに急速な進展を見せるIT(情報技術)などによる高度化・複雑化によって、社会構造の変化を余儀なくされることが予測されます。

それゆえ、あらゆる社会システムの基盤となる教育は、激動の20世紀を総括し、これまでの成果と課題を踏まえ、明確な理念と展望をもち、志をもって21世紀を踏み出す決意をしなければなりません。

21世紀は「**教育の時代**」です。

1 知識社会と教育

2000年4月、東京で開催された「G8の教育サミット」は、議長サマリーとして、次のようなやや刺激的な報告をしました。

「知識社会は重要な機会を提供すると同時に、現実的な危機をももたらすものである。知識社会においては、これまでの学習や教授のあり方に根本的な変化が求められる。」

さらに、新しい時代の「労働市場で求められる



技能レベルは高く、すべての社会は教育レベルの向上という課題に直面している」とも報じ、高い技能を身に付け維持できる者は、社会的にも経済的にも成功を収めることができるが、そうでない者は安定した文化的な生活に必要な収入を得る見通し

も持たなくなり、かつてない疎外の危機に直面すると指摘し、知識社会の光と影に言及しました。

このように知識社会においては、教育の果たす役割が一層増大し、その在り方も大きく問われることとなります。学習機会一つ提供するにしても、その内容や形態を新たに組織し直したり、学習者の知的・情緒的・社会的要求を把握し直すことが求められることとなります。

2 新学習指導要領と学力

知識社会への移行が進む中、我が国の教育界は学力を巡って様々な議論が交わされています。

2002年度から実施される新学習指導要領では、指導内容が3割ほど削減されるため、児童生徒の学力が低下しないかとの不安が一つのきっかけです。

しかも、昨年12月に公表された第3回国際数学・理科教育調査において、得点は世界のトップクラスにありながら、「嫌い」が多いというデータと絡め、未来への不安を増幅させています。

それゆえに、私たちは、保護者はもとより地域社会の多くの人に、新学習指導要領のねらいを十分説明し、正しい理解を求める必要があります。

主な内容

- P1…年頭所感 静岡県教育委員会教育長 杉田 豊
- P3…地域の青少年に声を掛けましょう!
- P3…地域の子どもの食習慣改善モデル事業
- P3…教員民間体験研修強化事業スタート

- P3…教育委員会表彰
- P4…ぱりずむ パソコン時代 斎藤千代子
- P4…開かれた学校シリーズ 榛原町立榛原中学校

申すまでもなく、新学習指導要領は子どもたちに、自ら学び、考え、判断する力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしています。

子どもたちの学力は、単にたくさんの知識を教え込むことのみにより向上するものではなく、その知識が子どもたちの中に定着し、実際に生きて働く力、日常の生活や将来の職業生活、家庭生活に生かしていくことのできる力になってこそ、本来の意味を持つ、というのが基本的な考え方です。

それゆえ、厳選された基礎・基本が確実に定着するよう、個別指導やTTなどで学習の充実を図り、「ゆとり」の中でじっくり学習し、実感を伴って理解できるよう努めていくのです。このことにより、子どもたちは学ぶ楽しさや達成感を味わい、知的好奇心、さらには生涯にわたり自ら学ぶ意欲をはぐくむことになるのです。

マスコミを通してよく話題になった円周率3.14の代わりに3を使うのは学力の低下につながるとか、中学校の必修英単語の数が100語になっては、文章も作れなくなるなどの心配は、新学習指導要領の趣旨に対する誤解から生じたものです。

確かに円周率を3とすれば、円周とその円に内接する正六角形の周の長さが同じになってしまいます。しかし、新学習指導要領が目的に応じて3を用いることを認めているのは、あくまでおよその面積を見積もる場合などであり、子どもに必要な以上の計算による負担をかけないようにし、考える時間を確保しようという趣旨です。

また、中学校で学習する英単語の総数は、これからも900語程度です。確かに必修単語100は現行の507語に比べれば大きく減少していますが、今求められているコミュニケーション能力の育成のためには使用する場面等に応じた自然な英語を繰り返し指導することが大切であり、文章を作る際に使う名詞や動詞を一律に決めることはしなかったというものです。ですから名詞が一つも含まれず、文章が作れなくなるということも当たっていません。

3 これからの教育と教養

バブルがはじけ、先の見えない経済の停滞の中で、多くの方はこれまで築き上げてきた豊かな社会が崩れつつあるというイメージを抱いています。

一方、社会は価値観の多様化を生み出し、個々の生き方が尊重されるようになりましたが、生きていく上で社会共通の目標が失われ、一体感も薄れてきました。こうした混迷の中で、私たちには21世紀の国際社会において確かな存立基盤を打ち立てていく責務があります。

そのためには、私たちの社会がどのような地点に立っているのか見極め、今後どのような目標に向かって進むべきかを考え、その実現のために主

体的に行動していくことが必要になります。

中央教育審議会は、この原動力となるものが新しい時代に求められる「教養」であるとし、昨年の暮れも押し迫った25日に「新しい時代における教養教育の在り方について」の審議のまとめを公表しました。

その中で、新しい時代に求められる教養の概念を幾つかの切り口から説明していますが、例えば、教養は、基礎学力と知識、基盤となる国語の力、社会規範意識と倫理性、感性と美意識、困難を乗り越えるための体力と精神力など、「知・徳・体」、「知・情・意」といった概念の構成要素やその総体であることとらえています。また、別の観点から品性、品格なども教養を考える際に不可欠な要素として挙げています。

今回のまとめで特に注目したいことは、教養教育の在り方を検討するにあたり、高等教育だけではなく、初等中等教育も含めた教育活動全体を通して、教育的配慮のもとに幼児期からいかに教養を身に付けていくかを考える必要がある、と指摘している点です。

私は、教養も責任感や規範意識などと同様に大人になって急に身に付くものではないと考えています。

中教審は、初等中等教育段階において、**国民として共通に身に付けるべき基礎・基本**を確実に習得することが不可欠であり、とりわけ、「**読み・書き・計算**」をはじめとする基礎的な知識・技能を確実に身に付けさせるよう全力を注いで**徹底的に指導**することが重要であると指摘しています。

これは本県のこれまでの取組と軌を一にするものです。時代の変化が激しければ激しいほど社会は変化に対応できる力を求めますが、終局的には基礎・基本をどれだけ身に付けていたかに帰着します。常に基礎・基本の重視を掲げてきた教育方針を今後も推進したいと思います。

もともと教養は、自立した個人として、よりよく生きるために自発的に身に付けるべきものであり、学ぼうとする意欲が重要です。

近年、子どもたちや若者には学びからの逃避が見られ、社会全体に漂う目的喪失感、閉塞感の中で、子どもたちや若者にいかにして教養を培っていくかは、21世紀に課せられた最大の課題といえます。

おわりに

今回の中教審の審議のまとめは20世紀の教育を総括し、21世紀を指し示すものです。改めて熟読しながら新しいスタートをすることをお勧めします。

教育関係者各位の御活躍、御健勝をお祈りします。

地域の青少年に声を掛けましょう！

最近の青少年を見ると、制服で公然と喫煙したり、公共交通機関内で携帯電話で話したりするなど、ルールやマナーに反する行動が目立ちます。また、それらの行動に対して見て見ぬふりをしている大人が多いことも指摘されています。

そこで、県教育委員会では、公立学校の教職員や教職員OB（ユースサポーター）などが、1県民の立場で青少年に積極的に声を掛ける「地域の青少年声掛け運動」を始めました。賛同者は、12月25日現在約18,000人おり、声掛け



デザイン：県立清水南高等学校 辻村聡子さん

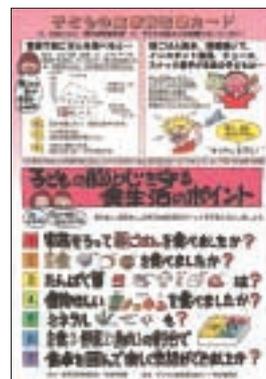
運動実行バッジ（写真参照）を着けて、自分の住む地域や通勤途上など様々な場で「おはよう」のあいさつをしたり、善い行いをした青少年を誉めたりして、健全な人づくり・地域づくりを目指しています。

この運動が青少年の善行を認め、問題行動に対しても声を掛けることができる社会の風潮をつくるきっかけとなるよう願っています。今年度末には、賛同者が2万人を越える見込みで、今後県民総ぐるみの活動に発展するよう期待しています。【青少年課】

心の問題は食習慣に一因！ —地域の子どもの食習慣改善モデル事業—

最近の子どもの心の問題は、食習慣の乱れに伴い、脳に必要な栄養素が不足することにも一因があると指摘されています。そのため、県教育委員会では、成長過程にある子どもが望ましい食習慣を身に付けられるように、県内の小学校55校、中学校30校、高等学校10校計95校をモデル校に指定し、校長、保護者の代表、養護教諭、学校栄養職員などを対象とした講習会の開催や「子どもの食習慣改善カード」（写真参照）を活用した保護者への啓発活動を実施しました。

朝食は学習効果にも大きく影響すると言われていたのですが、朝食欠食児童生徒数は小・中学生、高校生共に高学年になるほど多くなっているのが現状です。この事業により、保護者の意識が高まり、朝食をきちんと摂る、栄養バランスを考える、家族そろって楽しく食べるなど、子どもたちの食習慣が改善されていくことを期待しています。【体育保健課】



教員民間体験研修強化事業スタート

本年度から、3年間の予定で、原則として中学校・高等学校及び盲・聾・養護学校（高等部）の全ての教員が2日間企業等で学ぶ「教員民間体験研修強化事業」がスタートしました。本年度は1校3人の教諭が対象です。併せて、各学校では企業経営者等を招き講演会を実施します。本事業の目的は、次のようなものです。

教科内容の社会的有用性を教え、魅力ある授業づくりができる「頼もしい先生づくり」を推推する。

企業等の活動内容及び人材ニーズを把握し、進路指導に役立てる。

フリーターや就職後早期の離職者等の増加に対処するため、生徒の確かな職業観を育成する。

県教育委員会では、今後も時代の変化に的確に対応し、教育課題の改善に努める教員の育成に努めていきます。【生涯学習企画課】

教育委員会表彰

平成12年度教育委員会表彰式を11月14日と12月6日にル・ヴェールたちばなほかで、教育、学術、文化、スポーツ等で顕著な功績のあった、8個人5団体を表彰しました。

式では、被表彰者一人一人に上島京子委員長が表彰状と記念品を授与しました。



———表彰された方々（敬称略）———

関口昌男、太田良子、村松けい子、石橋慎太郎、平岡勇輝、小野真二、福室清三、河合純一、沼津市立門池中学校、小笠高校吹奏楽部、吉田高校書道部、新居高校ボート部ダブルスカルチーム、御殿場西高校空手道部 【教育総務課】



新世紀、新しい年おめでとうございます。
記念すべき年に、このメッセージを伝えられることは誠に光栄であり、私にとって21世紀の夢をかきたてる又とないチャンスともなりました。感謝！

言うまでもなく学校教育は、いつの時代にも社会情勢との関わりの中で実践されてきました。今世紀は、教育の中でコンピューターをどう生かすかが大きな問題になるでしょう。私の大学では、学生全員がパソコンを持ち操作します。ある授業の中で「21世紀の健康観」というテーマでレポートを書いてもらいました。その中の一つに『21世紀はバーチャルリアリティ（仮想実感）の時代になる。つまり、実際に体を動かさなくても画面の仮想の試合でヒーローにもなれるし、勝つこともでき、優越感も味わえる。だから、体を動かさな

くてもすんでしまう。しかし、パソコンを操作するのは人間だし、多様な画面を目にしたいのなら、意識して本を読んだり、文字を書いたり、数字に接したり、よく体を動かしたりといった基本的なことを体験しておかないとよい結果はでてこない。ただ単に機械の操作を覚えるだけでは人間が人間でなくなる危険性がある。』と書かれていました。

彼が言いたかったことは「不易と流行」ということに通ずると思うのです。不易なものは、時代や所によって変わることはないのです。人間が集団のなかで生きていく限り「不易なもの」なくして人間ではあり得ないし、それは、人が育つ根幹となるもので、人間共通の基本なのです。これが身につかなければ「流行」という社会変化の波にも乗っていけないし、まして創造力を期待するのも無理でしょう。不易なるものをもう一度見なおしませんか？ そうでないパソコン教育も単なる機械操作で終わってしまうでしょう。

パソコンの操作もままならず、まして、バーチャルリアリティなど体験できない私ですが、今年こそ挑戦の年と思っています。

(県スポーツ振興審議会会長、静岡産業大学教授)



自分の生き方を探り、夢を語る生徒を育てる ドリームフロンティア学習



榛原町立榛原中学校 校長 坂本 守

本校は、総合的な学習の時間を「ドリームフロンティア学習」と名付けて実践しています。

(ねらいを教えてください)

「榛原町の未来を語ろう」をテーマに、多くの町民の協力を得ながら、町の諸問題を総合的にとらえ、未来を構想する過程を通して、自ら学習し表現していく能力や態度を育てたいと考えています。

(その具体的活動内容は)

1年生は、「榛原町を知ろう」をテーマに、製茶工場、老人ホーム、清掃工場、空港建設地等を訪れ、調査や追求学習をします。2年生は、「榛原町を考えよう」をテーマに、情報、社会福祉、環境、文化継承などの領域別に体験活動を通して、基礎知識や考え方を学習します。3年生は、「榛原町と自分の未来を語ろう」をテーマに、「榛原町未来構想計画書」を作成する過程を通して、課題追求能力を育てます。3年間の集大成である「中学生議会」では、自分の未来を語るとともに、町長や地域住民に対して未来構想

を提言します。

(生徒たちの取組はどうでしたか)

教師の思いを越えた創意あふれる追求方法や表現方法の工夫が見られました。また、「中学生議会」では、町の未来を様々な視点から総合的に考え、調査結果に基づく夢のあるまちづくり提言をすることができました。こうした取組を通して、生き方を探り、夢を語るができる生徒を育てることができると考えています。

(教職員の意識改革につながりましたか)

これからの学校は今まで以上に地域住民と共に教育活動を展開するんだという意識が生まれてきています。

(地域の反応はどうでしたか)

生徒たちの受入れや地域の方の講師による授業を通して「榛原町の子どもは榛原町民で育てる」という意識が感じられるようになりました。

